

論文要約

論文題目 考古学におけるエスニシティの研究

平川ひろみ

エスニシティ（包括的には「エスニック現象」）は、現代においても考古学においても極めて重要な現象であるにもかかわらず未確立であった、エスニック現象への実証的アプローチ法を検討するとともにその意義を論じる。エスニシティについて考古学で十分な議論が行われているとはいいがたく、とくに日本考古学は欧米考古学に比べて大きく遅れている。日本では民族や部族などの実体的集団が前提とされた素朴で安易な議論が多く、複雑なあり方をするエスニシティを単純に捉えすぎているという欠点がある。しかし、世界の考古学にとっても、考古学的証拠からいかにして接近するかは方法論的に楽観できない問題である。

この研究を推進することは、エスニック現象を考古学的に把握し考古学の議論の地平を豊かにすることにつながると見込まれる。エスニック現象は人や社会を考えるうえでの根幹ともいうことができるが、その把握が不可能ならば過去の行為主体者に真に迫ることは不可能となり、考古学の「基盤」をも揺るがしかねない。逆に、正しく捉えられるならば考古学の新しい展開にとって喜ばしいことである。

本論はエスニック現象に関連する重要な事柄で、かつ難問でもある「個人」についても扱う。考古学は個人ではなく集団を扱うという普及した言説があるが、行為主体者であり直接的に考古学的証拠を残した個人を実証的に扱わなければ、考古学は過去の本質に迫りえない「虚構」の営為となる。「個人」を扱うことはエスニック現象を扱うことの一環でもあり、考古学の理論やあり方をも変えることになるを考える。さらに、「個人」を見出すには考古学的対象のディテールに注目する必要がある、科学的諸方法を含む取り組みが必要である。本論は理論と方法を中心とするが、後半では事例も織り交ぜながら検討した。

本論の構成は以下の通りである。

目次

序章

第1章 考古学とは何か

第1節 考古学の定義と学史の検討

第2節 考古学の今日的意義——本論との関係から——

第2章 考古学とエスニック現象の過去と現在

第1節 日本考古学のコンテキスト

第2節 欧米考古学のコンテキスト

第3章 考古学的アプローチ法の検討

第1節 エスニシティとハビトゥス

第2節 分析の視点と方法

第3節 まとめにかえて—考古資料から民族はどう描けるか—

第4章 個人・行為・アイデンティティ

第1節 個人を扱うことについて

第2節 個人の実証的把握

第3節 個人・模倣・アイデンティティ

第5章 朝鮮系無文土器の諸問題

第1節 はじめに

第2節 研究の現状——批判的検討——

第6章 周辺地域におけるエスニック現象

第1節 エスニック現象と考古学

第2節 エスニック現象の例

第3節 エスニシティの転換

第4節 鹿児島県三島村のケース

第7章 まとめ

第1節 考古学におけるエスニック現象

第2節 今後の展開と展望——新しい考古学の再構築へ向けて——

結語

謝辞、文献、索引

以下は論文内容の要約である。

序章では、本研究の意義と目的について論じた。過去の復元を行う考古学において、エスニシティ（包括的には「エスニック現象」）は重要な概念ないし現象である。しかし、従来の議論は十分とはいえず、欧米に比べてエスニック現象が安易で素朴に扱われている日本考古学では、より未発達といえる。そもそもエスニシティは、一般に主観的なものであるため、考古学はそれを直接把握し検討することは困難であり、ついでに過去の復元は困難という可能性が常につきまとう。エスニック現象を考古学は捉え得るか、という問いは考古学の限界を考えることにつながり、不可能であれば考古学は過去のエスニック現象への言及をはじめ、過去の行為者に迫ることは不可能という考古学の基盤をも揺るがす問題が生じることを述べた。このように、方法論的に楽観できない重大な問題が横たわる一方で、従来の日本における考古学的研究の議論を振り返れば、人種・民族・社会・集団・異文化交流・移住などといった用語が多用され、その議論は未発達かつ不十分なまま放置されているのが現状である。この現状をどのようにして超え、より適切にアプローチするかが現代の考古学者にとって大きな課題である。本研究の大きな目的として、これまで未確立であったエスニック現象へのアプローチ法について検討することを論じた。

また、エスニック現象へのアプローチ法の検討を通じて考古学の新しい枠組みの構築に貢献できる。欧米の学派的立場から自由であり「オルタナティブな考古学」である日本考古学は、欧米考古学のコンテキストで議論するより、それを考慮しつつ日本考古学の特性を活かすべきであり、それが考古学全体への貢献の点からも生産的であるというのが本研究の立場である。

第1章「考古学とは何か」では、考古学の役割・意義の検討を行い、学史から考古学の特性を考察し変化の方向を予測した。日本考古学では理論的自覚に乏しいが、欧米では60年代の欧米のプロセス考古学の出現により考古学理論が発展し、科学性や理論を自覚し実践する契機となった。それが考古学の殻を打ち破り、明確な根拠のもとに民族考古学や現代考古学などの実践に至った。プロセス考古学の科学主義的性質などを批判して登場した80年代からのポストプロセス考古学も理論面での深化があり、社会における個人と物質文化の相互関係の重要性や自省的考古学など、認識の転換に大きな役割を果たした。プロセス考古学とポストプロセス考古学間の対立的議論の結果、多くの遺産が得られた一方で、理論的行き詰まりなど問題が多く残ったことも事実である。以上の検討から、①考古学は現代社会に役立つべきであること、②研究主体そのものや物質文化と人間との相互関係を明らかにする必要があること、③極端な相対主義に陥ることなく科学的に納得できるものを提示すべきこと、を指摘した。

第2章「考古学とエスニック現象の過去と現在」では、考古学とエスニック現象の関係について、過去の人や集団に対する考古学的アプローチ法を学史的に検討した。日本考古学のコンテキストを検討し明治期の人種・民族論争からの歩みをふりかえり、特に戦後の「実証主義」が人を捉えてこなかったことを指摘した。また、伝播論的・文化史的枠組みが根強く、物質文化の動態が人の動態に直結するなど不適切な実践がされ続けていることを指摘した。ただし、1990年代以降から欧米考古学や人類学等に明るい世代が登場し、日本考古学の伝統といえる詳細観察と新しい理論・思想とのハイブリッドによって先端的研究の萌芽がみられたと分析した。次に欧米考古学のコンテキストを検討し、古典的な文化史的枠組みでは集団・文化の捉え方が日本考古学と類似していたことを指摘した。その後、「スタイル論争」などの議論等を通じて人を正面から捉えることにつながったことを述べ、ポストプロセス考古学の中には道具主義的なエスニシティの捉え方をして画期となった社会人類学者 F. Barth の理論と共通点が見られることを指摘した。加えて、エスニシティ論に関する人類学者による諸議論を検討し、概ね90年代以降は、Barth以降の人類学者の影響を受けた本格的なエスニシティ論やエスニック現象を考古学的に行う研究者が出現し、新展開を迎えたことを論じた。

第3章「考古学的アプローチ法の検討」では、考古学的アプローチの方法について検討を加え、エスニシティに接近するには「ハビトゥス」の概念を使用することが有効であることを論じた。また、日本考古学の得意とする遺物の詳細な観察を発展させつつハビトゥスやモーターハビット等の概念を適用した研究例を検討した。もはや考古資料から民族を

素朴に描くべきでなく、これまでのような無邪気な捉え方を継続してはならないが、考古学が人に関する学問である限りエスニックな問題は避けて通れず、積極的に対峙すべきである。現状を乗り越えるには考古資料から抽出しうる行為者のハビトゥスを見出す必要があり、エスニシティやエスニック現象を考古学が適切に扱うには個人への着目が欠かせない。また、ハビトゥスの復元法についてはそれ自体が開拓途上にあることから、実践的に考古学的研究を行い、問題点を検討するというサイクルを確立することが有効である。日本考古学は、諸外国の考古学に比べて調査頻度が高く、また豊富な資料が蓄積されてきたという好条件を備えていることを考えれば、その資料を活用し新しい理論・方法を構築することこそ日本考古学の特性を活かした学問的貢献となる。さらに、エスニシティが時空間に関係なく人に関する解明や理解のための重要な要素の一つであれば、日本考古学が保持する資料の活用には必然性があると論じた。

第4章「個人・行為・アイデンティティ」では、考古学における「個人」の重要性について論じた。日本考古学で伝統的な枠組みと方法論を採用し続ける限り、エスニシティやエスニック現象を適切に捉え、解釈することは困難である。それを乗り越えるには、考古学で遺物・遺跡として目にするものが、「集団」ではなく直接的には過去に生きた「個人」の行為による物理的変化の結果であるという認識の転換が必須である。考古資料から看取される行為の痕跡は、直接的には「集団」ではなく「個人」の行為であることを指摘し、エスニシティを把握するうえで鍵となるハビトゥスも同様に、看取される最小単位は「個人」であるため、エスニシティと考古資料の間の橋渡しとして「個人」の概念は欠かせないことを論じた。このほか、「個人」の行為を読み解くうえでモーターハビット（動作習慣）に注目することが重要性であることを指摘した。以上をふまえ、考古学で「個人」を把握するための方法論や民族考古学的調査の実践から得られた諸情報について論じた。また「個人」を深く知るために、技術習得や模倣のメカニズムなどに焦点をあて、関連するヒトの認知や模倣のメカニズムについても詳論した。

第5章「朝鮮系無文土器の諸問題」では、理論的検討を実践に移す試みの一つとして、北部九州の弥生時代で移住者のコロニーと目されてきた朝鮮系無文土器を出土する遺跡を取りあげた。朝鮮系無文土器や擬朝鮮系無文土器に関する従来の定義や研究法を検討し、現状では証拠不十分のまま製作者の移住などに言及していることや土器の変容を直接的に世代的な同化の過程と認識していることなどの問題を提示した。また、土器など物質文化の挙動をダイレクトに人・集団の挙動とみる伝播論的考えを批判した。無文土器と弥生土器の関係について、蛍光 X 線分析による胎土分析データの検討などにより無文土器が同一遺跡内の在地生産であったと推定されることを指摘し、新たな枠組みを適用したところ、従来と大きく異なる解釈ができることを明らかにし、新たな枠組みは有効性があることを論じた。

第6章「周辺地域におけるエスニック現象」では、周辺地域・境界領域の人々が異文化・異世界との相互交渉を通じて自分たちのエスニシティ／エスニック・アイデンティティを

形成、変容、操作、転換したことを論じた。日本考古学で文化的「後進地」として扱われることのある西北九州～南九州の島嶼を含む沿岸部を事例として、周辺域におけるエスニシティについて実践的に検討した。西北九州では弥生時代成立のプロセスに加え、弥生時代の貝輪交易をめぐっても異文化どうしの仲介者として異質なハビトゥスを採用したことを論じ、後進的に見える文化はむしろ戦略的な産物であるという解釈が有効であることを主張した。また、弥生時代中期後半の北部九州の政治的系列下にあるとみられる周辺域のエリートの墓を検討し、埋葬にみられる北部九州から「下賜」された威信財の「正しい」扱いと二次葬という在地的風習の混在について、単なる周辺域における変容ととらえず、ハビトゥスに基づき伝統的埋葬風習との折り合いをつけた積極的行為であるとの解釈を提示した。また、弥生時代終末期頃から古墳時代の南西諸島北部の文化転換は、人々がエスニック・アイデンティティを転換した重要な事例とみることができる。さらに、薩摩半島西部の古墳時代前期に海上交易に携わる人々について、炊事に関する個人の行為において在地土器を土師器と「見なし」と解釈できる例を挙げた。薩摩半島の南の洋上にある鹿児島県三島村にも触れ、この日本中世における南限地域は異文化どうしの直接接触を避ける「心理的バッファー」として機能し、結果として禅宗など中国文化の受容に大きな役割を果たしたことを指摘した。このように、周辺地域の現象を「エスニック現象」として捉えなおせば、従来にない新しい解釈と説明が可能である。日本列島では長期的に継続する固定的な地域的文化的存在が主張されることがあるが、そのような静的な見方は周辺域の動態と歴史的役割を捉え損なっていると主張した。

第7章「まとめ」では、以上をまとめるとともに、考古学は「時間の深さ」を扱える特性をもっており、過去数千年のエスニック現象を跡付け、エスニシティの出現の過程やそのメカニズムについても証拠をもって論じうる。この利点を駆使し、現在に至る様々な時間・場所の研究を実践しエスニシティを根本から捉えなおすことで、学問的責務を果たせる。「人間とは何か」という問題に深く関係する科学にとってエスニック現象を扱わずに人間を理解できず、それらを含み込んだ形で実証的に過去を扱うよう考古学を再構築すべきことを提言した。